

電子黒板を生かして「使える外国語力 (フランス語・英語を中心に)」を育てる

1. はじめに

カリタス学園はカナダのケベック市に本拠を置くカリタス修道女会を母体とし、幼稚園から短大まで16年間の一貫教育で英語とフランス語の2カ国語を教え、コミュニケーション手段として日本語と共に英仏語を使いこなせる人材を育てることを目指している。

小学校外国語科は2010年度「電子黒板を生かしたインターアクティブな英仏語教育-自作教材を使って-」の研究でパナソニック教育財団36回一般助成を受けた。その結果、理論・技術両面から外部の複数専門家のアドバイスを心得て電子黒板の使い方、デジタル教材の作り方を学ぶだけでなく、高度な外国語教育論に触れ、教員も児童もインターアクティブな授業を享受することができるようになった。さらに幸いな事に表題のテーマで2年目の研究助成も得た。

期せずして2011年春、在日仏大使館からDELFL Prim(フランス政府認定小学生世界共通テスト)日本第一回実施への参加要請があった。3.11震災で延期となったが、6月末に10名が受験、フランス大使館文化参事も驚く好成绩で全員合格した。DELFLをきっかけに、世界基準の「使える外国語運用能力」に対する研究に対して外国語科教員の意欲が大いに盛り上がった。欧米諸国の小学校では電子黒板の使用は当然で、外国語学習用の電子教材も多い。ネット上でも英語による様々な教材情報が流れている。韓国、シンガポール、香港などのアジア諸国でも外国語教育開始の低年齢化とIT化が急速に進んでいる。日本がすべての面で遅れを取っていることに大いに危惧の念を抱いている。

2. 研究の狙い

1年目の研究成果を踏まえて、まずはIT機器に振り回されることなく、基礎となる理論確立の必要を痛切に感じた。つまり、小学生でなければ学べないこととは?小学生だからこそ身につけられることとは?中学生になる前につけておきたい力とは?を多面的に探る必要である。

言葉は音であり、気持ちや考え、さらには情報を伝達するための手段だと考える。母語ではない外国語としての英語やフランス語、しかも日本の日常生活ではほとんど接することがない外国語(特にフランス語)を小学生がどう学び、どうしたら使えるようになるのか。児童が使っているという意識を持てるのか。もっと使いたい学びたいと意欲を抱くのか。それ以前の問題として、複数言語教育、つまり普通の日本人小学生がフランス語を学び、さらに英語も学ぶということをどう考えればよいのか。

理論面ではカリキュラムの一層の整備と授業力を磨くことを、技術面ではデジタル教材の開発とIT機器のさらなる使用方法を探り、週一回の授業でも身につく聞く・読む・書く・話すの4技能学習法を英語と仏語の両方で研究したいと考えた。

3. 研究の実践

以上をふまえ、本助成に対して五つの実践を企画し、多角的に研究を進めた。

(1) 理論研究

本助成で理論アドバイザーをお願いしている久埜百合先生（中部学院大学客員教授）を囲んでほぼ毎月勉強会を行った。子どもの精神的発達段階の特徴、子どもの言語習得プロセス、指導順序の考え方、授業の構成法、音声重視の意味、語順を体得させることの大切さ、意味のある言葉のやりとりの必要性、イントネーションや発音に特徴づけられる各言語特有の「らしさ」を重視する、音の枠組みを体得させることを文字指導より優先させる、歌やライムを通じて文化的背景と共に音の塊として言語を認識すること、言語のルールを子ども自身に発見させる、文字を読むことから書くことへの指導法などなど、実際の授業研究や教材研究をしながら丁寧に解説いただいた。この勉強会には他校の英語教師も参加することもあり、熱心な議論はつきなかつた。

(2) 独自デジタル教材開発

技術アドバイザーの小野寺健吾氏（(株)東大英数理教室）からは本年度は、Photoshop や Flash といった専門的なソフトを使い、やや高度な教材作りを学んだ。

① Flash を使ったカラオケ字幕挿入

Adobe FlashCS5 を購入。まずはフランス人による動画に歌詞を書きこみ、カラオケを制作した。続いて、音楽科中村恭子教諭にフランス語で校歌を歌ってもらい録画しそれにも歌詞を書きこんだ。最後は、本学園ベルニエ理事長の英仏語による「主の祈り」のビデオにも文字を挿入した。校歌と祈りのビデオは数年前から 4・5・6 年の授業の最初に流し、聞いて覚える方式を取っていたが、映像と共に文字が流れることでより速やかに記憶できるようになった。



Flash で字幕カラオケを挿入

② デジタル英語版 *Word Book*（久埜百合著：ぼーぐなん社）のフランス語版制作

昨年度は、紙媒体の *Word Book*（ぼーぐなん社、1500 語収録）にフランス語シールを貼り、英仏語絵辞典として教室に 40 冊設置した。今年度はデジタル版を購入、Photoshop を使って英語とフランス語を併記し、ネイティブによる音声も貼り付け、いつでも自然な発音が聞こえるようにした。デジタル版に情報を入力するのはかなり手間がかかるが、完成すれば半永久的に使えるので、慌てず緻密に作業を進めている。

③ 自作デジタル教材 ABC チャート単語編、前置詞編

久埜先生監修の *English in wonderland Green Book* にある ABC チャートのフランス語版を企画した。制作過程で何度も久埜先生からイラストの指導を受け、正確なデッサン、目に優しい色遣い、自然さ、ユーモア、全体のレイアウトなど久埜流教材作りの奥義を学べたことが大きな収穫である。



ABC の文字を押すとそれぞれの単語発音が何度でも聞こえる

まず、ABC の文字で始まるフランス語単語のうち、子どもたちに身近な言葉をリストアップさせた。その中から 2 単語ずつ計 52 単語を選択し、イラスト担当の乾篤子先生に依頼した。さらにそれを Photoshop と Notebook を使い、教務補佐の高見澤朝子さん（小学校卒業生）の手でデジタルチ

ャートに構成した。一方、フランス人 Barbara 先生に 52 単語の録音を依頼。単語を棒読みするのではなく、その物が目の前にあるようにイメージして、自然なイントネーションで読むように工夫してもらった。単語の羅列に次いで、その単語を使った単文、その単語を答えにした 3 ヒントクイズの 3 種を作り録音した。最終的にはチャートの一定個所を押すことで音声が出るようにし、3 種類のチャートができた。

二枚目は、アルファベット単語を組み合わせた前置詞（上・中・下）学習用のチャートである。



A は un ananas(パイナップル) une assiette(お皿) B は une banane(バナナ) une boîte(箱)・・・H は un hibou(フクロウ) un hélicoptère(ヘリコプター) という具合に



一文字から二つの単語を選び、それを組み合わせた絵を作る。例えば、パイナップルがお皿の上のっている。バナナが青色(bleu)の箱に入っている。フクロウがヘリコプターを操縦している。26種のイラストを並べ、L'ananas est sur l'assiette. La banane est dans la boîte.と文も下に打ち込む。絵を押すと文の発音が出、文がフェイドインする。さらに、教師が“Mets l'ananas dans la boîte.”と指示すると、児童はパイナップルの絵を箱の中



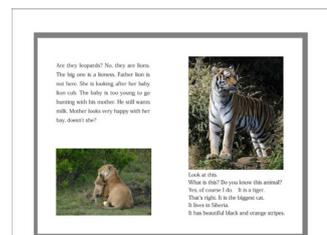
に移動できる。慣れてきたら、児童同士で問題を出し合うこともできる。“Où est la banana?”

“La banana est dans la boîte bleue.”(バナナはどこ?バナナは青い箱の中)という会話も

可能である。音を聞き、実際に物を動かし、繰り返しが可能、という電子黒板の特性を生かしたおもしろい活動になった。

④ デジタルブック「Close look at animals」試作

動物写真家内山晟氏撮影の動物写真を使い、それに英仏語で文をつけ、デジタルブックにする構想である。内山氏の心温まる画像に、久埜先生の英文が寄り添い、それを InDesign でデジタルブックにし、Windows タブレット PC で操作できるようにした。まだ試作の段階であるが、これからフランス語版も作り、音声も貼り付け、本格的なデジタル副読本として児童に使わせたい。



InDesign でデジタルブックを作成。指でページがめくれる。英仏語のテキストと音声をつける予定。

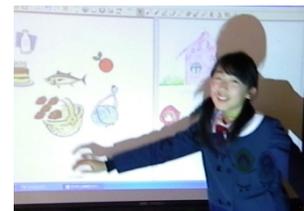
(3) 児童によるデジタル発表

通常 4.5.6 年の授業で電子黒板を使用している。イラストを見せながら音を聞かせて状況を把握させたり、音を流しながらテキストを見せて知っている言葉を探させたり、単語とイラストを結んだり、単語を入れ替えて自分で好きな文を作らせたり、カラオケ付き歌の動画を見せたり、Comptine(わらべ歌)を 4 コマ漫画にして一節ずつに切り分けた音からどのコマの画像のことを言っているのか聞きとらせたり・・・と電子黒板ならではの使い方授業に変化をつけている。だが、児童が電子黒板に触って動かし、書き込こんだりはあっても、なかなか黒板を使って言葉を発する状況が生み出せず、悩んでいた。5・6 年になると特に女子は自我が目覚め、失敗を恐れて人前で発表することを嫌う傾向が強くなる。Receptive(聞き取り読み取りの受け身の授業)から Productive(話す、書くの発信型授業)にどう発展させればいいのか。



6 年生 3 学期には「赤ずきん」を課題にし、グループでの劇、一人芝居、一部を語る、キーワードを別の言葉に置き換えてマイ**ずきん作りなど、自由な発想で独自の発表をするように指導している。女子は絵や文字を書くことが好きで、丁寧に独自の世界を描き上げる。これをなんとかデジタル化して、自分の言葉で発表できないかと、デジタル紙芝居を考えた。電子黒板にイラスト

トを映し、それを児童が動かしながらお話を語る。あるいは、電子黒板に写した絵の前で実際に演じて、それを映像化する。電子黒板の操作方法にまだ問題が残るが、児童は電子黒板を使いながら楽しみに発表してくれた。IT 機器もフランス語も使えると言う満足感を身体全体で表現していた。来年度は、InDesign とタブレット PC でもっとスムーズに発表させたいと考えている。



(4) フランス語クラスに英語授業

本年度初めての試みとして、フランス語を学ぶ 6 年女子クラスに久埜百合先生の英語授業を実施した。フランス語を学んできた児童に、どこまで英語対応能力があるのか？子どもにとってフランス語と英語は全く別ものか？6 年 2 組半数（10 月）と 6 年 3 組全数（3 月）の 2 回、英語授業をお願いした。先生や生徒の名前の漢字から曜日に関する英単語を連想させ、さらに時折フランス語も入れながら一週間の英単語



T&L を使った久埜先生の英語授業

を知る。さらに Word Book の動物園のページからクイズで動物を当てるなど、英語だけの 40 分間を楽しんだ様子だった。結果、フランス語しか学んでこなかった児童が、英語学習に強い関心と意欲を持っていること、フランス語学習で培った聞こうとする力、聞き取れた単語から全体を類推する力が英語学習にそのまま使えることがわかった。参観した教師からも「子どもたちの英語もわかる、話せるという外国語学習に対する前向きな姿勢がよかった」「フランス語を学んでいるから、英語もわかるはずと思う子どものたくましさ

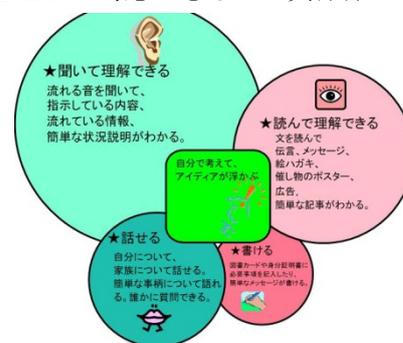
に驚いた」「フランス語も英語も、肩に力を入れず、自然に馴染んで声に出している姿がよかった」などの声が寄せられた。

4. 考察と評価

上記の 5 つの実践にはどのような意味や意義があるのか。まずは本年度の課題である「使える語学力」とは何かの観点から考えてみたい。

最近、日本の外国語関係者の間で話題になっている CEFR だが、Common European Framework of Reference for Languages の略で「ヨーロッパ共通参照枠」と訳されている。EU 圏における言語運用能力の共通標準化である。CEFR では、「言語は人が何かをするために使うもの」とする行動中心主義的アプローチ (action-oriented approach) に基づいて言語学習をとらえている。フランス大使館が実施する DELF Prim はこの一環で、8~12 歳児童に対する世界標準のフランス語運用能力判定テストである。海外在住経験もない普通の日本人児童が週一回教室で学んだフランス語でどこまで対応できるのか興味深い研究テーマである。

CEFR が求める言語の 4 技能を小学生レベルで考えて右の表にした。子どもの言語習得に鑑みて、「聞いて分かる」、「読んで分かる」が大前提で、その後「話せる」、最後に若干の「書ける」能力が付く。聞いて分かるようになる前に、各言語が持つ音的「らしさ」を身につけることは不可欠で、それには 9 歳前後までにどれだけ本物の良い音を聞かせるかがカギとなる。



聞く・読む>話す・書く

2011 年 6 月の第一回 DELF Prim で 10 名全員が合格し、2012 年 3 月の第二回には 24 名が挑戦した。24 名中半数は 2011 年度秋季仏検で 5 級に合格しているが、4 技能の中でも「書くこと」と「話すこと」が難題であ

る。辞書なしで書き、10分間の個人面接を受ける。二回の受験を通じて、柔軟な感性、豊かな内面性、豊富な経験が勝負とわかった。もちろん、最低限の文法的知識、単語量、発音の良さも問われるが、それ以上に言葉を使いたい意欲を高く評価する。知識ではなく、まさにコミュニケーション能力が問われるのだ。面接試験を終えた児童が口々に「楽しい」と言っていたが、相手に自分の意思を伝えることができ、充実した体験だったのだろう。つまり言葉を使って気持ちが通じ、同じ時間を共有できた満足感である。普段の授業でこうした力をつけるには、カリキュラムと教材の整備、授業力の向上が求められるが、一筋縄ではいかない。目指すものがはっきりしただけでも教える側は楽になったと思っている。

翻って、そうした「言葉を使える能力」を高めるためにデジタル教材、教具はどこまで有効か？デジタルなら何でも良いのか。否、何をするかの方針を明確にしたデジタル教材でなければならない。年間30回、4年生までは36名一斉授業、5.6年で18名の半数授業。この厳しい条件を最大限に活用する



ために有用なデジタル教材でなければならない。児童が思わず聞いてしまう、そして思わず答えたくなる魅力あふれる教材作りが急務である。素材としては、きれいな発音、自然でやさしい語り口調、思わず目が釘付けになり、いつまでも見飽きないイラストや写真、軽いウィットやユーモア、「えっ」と思わせる仕掛け、さらには児童の自作作品や他教科で使用した教材の流用も考えられる。その教材で何を教えるかを忘れて、思わず教材

作りの面白さに熱中することも、教師としては気をつけたい。

本校は現在、女子はフランス語、男子は英語という住み分けを行っている。早い時期に男女ともに、無理のない範囲で英仏二言語学習に移行すべきであろう。その根拠とすべく、フランス語クラスに英語授業を実施してみたが、大人の心配をよそに、児童は柔軟な反応を見せた。小学生には難しいと思われるが、本校ならではの複数言語教育の可能性も探りたい。

5. 今後の課題

2010年度、2011年度と二年連続の研究助成で期待以上の学びがあった。さらに嬉しいことに2012年度への継続が決まった。異例の三年連続と聞き、その責任の重さに外国語科教員だけでなく、カリタス小学校関係者一同身が引き締まる思いである。

意味のある、簡単に作れる、児童が使いやすい、汎用性があるデジタル教材の開発をさらに進めたい。当然、それ以前にカリキュラム（特にフランス語）の整備と、「聞く」、「読む」から始まり、最終的には「話す」「書く」の4技能へと無理なく児童を導く授業力も要求される。新年度はタブレットPC20台も導入されるので、新しいIT教具の有効使用も考えたい。

6. 研究成果を普及させるための活動

今回の研究で得た成果を普及させるために、保護者や一般に向けては、参観日（6月、11月、1月）と学校説明会（6月、9月）で授業を公開した。フランス語教育学会（5月）と外国語メディア学会（11月）で学会発表も行った。さらに他校の先生を対象としたワークショップを1月と4月に企画し、大盛況であった。



フランス語教育学会での発表

来年度はさらに日本私立小学校連合会の外国語部会を通じて神奈川県や全国の先生方と積極的に成果を分かち合いたい。学校説明会や参観日、学習発表会などを通じて保護者にもIT技術を駆使した外国語授業の様子を参観し、新し

い時代の児童の学びを知って欲しい。

DELFLについては、今後も継続参加するつもりで、フランス大使館関係者と協議を重ねながら CEFR が要求する「使える言語力」を育む方法を考え、その狙いや学習ストラテジーを英語関係者とも共有し、日本の小学校外国語教育のレベルを世界基準に引き上げたいと考えている。



LETとの共催ワークショップ1月
40名ほどの小学校教諭が集まり、少
人数グループで実際にSBに触りな
がら教材作りを話しあった。

6. 参考文献および関連サイト

Marcia Jeans “Creating Smart Board Lessons Yes, You Can!” Scholastic 2011

Smart Exchange <http://exchange.smarttech.com>

日向清人「CEFRとは」日向清人のビジネス英語雑記帳

<http://eng.alc.co.jp/newsbiz/hinata/2007/12/cefr.html>